

パネルディスカッション「漢文訓読再発見」

著者	渡辺 さゆり, ホイットマン ジョン, アルベリッツィ ヴァレリオ・ルイージ, 朴 鎮浩, 唐 ?, 當山 日出夫, 小助川 貞次, 高田 智和
雑誌名	訓点資料の構造化記述 成果報告書
ページ	125-142
発行年	2013-03-29
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告 ; 12-08
URL	http://doi.org/10.15084/00002653

パネルディスカッション「漢文訓読再発見」

渡辺さゆり，ジョン・ホイットマン，ヴァレリオ・ルイージ・アルベリッツィ，
朴鎮浩，唐煒，當山日出夫，小助川貞次，高田智和（司会）

高田 NINJAL セミナー「漢文訓読再発見」の第2部はディスカッションです。司会は国立国語研究所の高田が務めます。どうぞよろしくお願ひします。

講師とコメントされた先生方と、そのほかパネラーの皆さんに並んでいただきましたが、皆さんからの質問を基にこれからディスカッションをしていきます。

それでは、一つ目の質問です。「どうしてこの分野の研究をしようと思ったのですか」という非常に素朴な質問が届いています。皆さま、自己紹介代わりに、このご質問に順にお答えいただければと思います。よろしくお願ひします。

渡辺 「どうしてこの分野の研究をしようと思ったのか」、それはやはり小助川先生が素晴らしかったからですね。漢字や漢文を読む側面から日本語の歴史を知ることが好きだったのです。もともと歴史が好きでしたし。日本語も好きですが、歴史が好きだったという自分の個人的な性格と、授業と興味がそこで一致して、本当にちょうどいい出会いが私をこの道に導いたのではないかと思います。

當山 私の師匠は太田次男という先生です。先ほど画像で紹介しましたが、日本における金沢文庫本『白氏文集』の研究の第一人者です。その先生の授業を大学2年生のときから取っていて、3年生のときには大学院博士課程の授業までずっと聴講していたということがありました。その先生の影響ですね。金沢文庫本『白氏文集』をきちんと読んでみたい。私はたまたま国文科にいたので、まずは訓点から入ろうということで訓点の方をやり始めたというような結果です。まず先生ありきですね。先生がたまたまその分野の研究の第一人者であったということが大きく影響しています。

ホイットマン 個人的にお答えすると、私は小助川先生がおっしゃったように言語学者です。言語学が専門で、いわゆる自然言語のどういうところが言語によって違うのか、どういうところが共通するのかということに興味があります。

なぜ日本語を取り上げて、なぜ訓点資料に興味があるかということ、これも小助川先生のコメントにも出てきましたが、日本語という言語は貴重なものです。貴重な現象をたくさん教えてくれる言語です。言語学者から見て、一つは、現在の世界で主流となるヨーロッパ

パの言語と極めて構造的に違う言語でありながらも、研究が非常に進んでいます。ですから、言語学者として研究すると、そういう意味で価値があります。訓点に関しても、小助川先生がおっしゃったように、もしかすると、以前非常に広く行われた文字の使い方が現在の日本語の文字生活、言語生活に保たれているということも重要な歴史的・文化的な課題だと思います。

高田 次は、パネラーとして加わっていただいている、早稲田大学のヴァレリオ・ルイー
ジ・アルベリッツィ先生です。

アルベリッツィ はじめまして、アルベリッツィと申します。

どうしてこの研究分野を選んだのかというのは散々される質問ですが、ホイットマン先生とほかの方々がおっしゃった内容とは別の理由でこの研究分野を選びました。

まず、私はイタリア人ですが、イタリアでは普通に、大学で日本文学の試験がありました。2年生ぐらいだったと思うのですが、アメリカ人の有名なドナルド・キーン先生が『日本文学概論』という本を書いている、その中の『平家物語』のところに『平家物語』の典型的な文体は和漢混交文である」という文章があったのです。周りにいたイタリアの先生たちに「和漢混交文とは何ですか」と聞いても、ちゃんと答えてくれる人は一人もいませんでした。

そして、留学のチャンスに恵まれて初めて日本に来て、幾つかの資料を自分で集めました。当時は自分の日本語のレベルをはるかに超えた資料ばかりだったのですが、少しずつ読んでみて、自分なりの解釈をして卒業論文を書いたのです。そして、日本語と漢文が交ざっているスタイルを勉強するには漢文訓読がどうしても必要になるということが分かっていたので、日本に留学しました。そして、當山先生、渡辺先生のように、たまたま東京大学に留学するチャンスを得たときに、そこで私の先生に巡り会いました。その先生は一流の専門家だったために環境にも恵まれていて、たくさんの資料に触れることができました。当時の東京大学の国文研究室にあった一つの資料を自分の博士論文の題材にして、ますます古い日本語の系統に興味を持ち続けて、現在に至っています。

高田 続いて、ソウル大学校の朴鎮浩先生です。今日のパネルディスカッションのために韓国からお越しいただきました。

朴 私は日本語が下手ですので、私の話の中に間違いがあっても了解していただければと思います。日本語の表現に困るときには北海道大学の申さんに通訳をお願いします。

私の専門は韓国語史です。韓国ではハングルという韓国語を表記するための文字が 15

世紀に作られました。それ以前は、韓国語は漢字を利用して表記されました。日本の万葉仮名によく似ている方法で、漢字の略体字を利用して韓国語が表記されました。漢文テキストの中には日本の訓点資料のような方法で、韓国語の助詞や助動詞などが表記されています。

韓国語の15世紀以前の歴史を研究するためには、ハングル資料だけではなく、訓点資料についての研究が必要です。それで、私は漢文訓読や口訣資料について関心を持つようになりました。特に2000年には、韓国で日本のヲコト点とよく似ている資料が新たに発見されました。日本の小林芳規先生がそんな資料を発見しました。韓国のヲコト点資料を研究するためには、日本のヲコト点資料との比較研究が必要となります。それで、私も2000年以降に日本語を勉強し、日本の訓点資料についての研究をしながら、韓国語と日本語を比較して韓国語史の研究を進めています。私が漢文訓読に関心を持つようになったきっかけはそれです。

高田 続いて、もう一方パネラーとしてここに加わっていただきますのは、北海道大学の唐煒先生です。どうぞよろしくお願いします。

唐 こんにちは。唐煒です。実は私は渡辺先生の後輩に当たります。私たちの共通の指導教官は石塚晴通先生です。

最初に、「中国人でもともと漢文を読めるのに、どうして漢文訓読の研究をやっているのですか」とよく聞かれることがあります。私が修士課程のとき、渡辺先生は博士課程でゼミが一緒でした。渡辺先生と一緒にの時期に、実は私は日本の漢文訓読という学習方法に強くあこがれを持ちました。なぜなら、中国語が分からないまま漢文が読めることに関して大変関心があったからです。それがきっかけだったと思います。最初に私が研究したのは、皆さんもご存じの『日本書紀』ですが、『日本書紀』の中の中国語語彙の訓読について研究してきました。

高田 最後にもう一方、小助川先生にも聞いてみましょう。

小助川 私は大学に入るときは弁護士になりたいと思っていて、法学部のある大学を受けました。慶應、明治、中央の法学部が全部駄目で、北大は文類と理類の二つの枠しかなかったのですが、最後は北大で法学部に行こうと思っていたのですが、大学の教養時代にずっと遊んでいたのが成績が悪くて行けませんでした。そうこうしているうちにずっと小説を読みあさっていて、「これは文学がいいな」ということで文学を選びました。

ずっと近代文学をやりたいと思っていて、3年生になって、もちろん近代文学の先生の

ゼミも取ったのですが、強烈な方がいらっしやって、とにかくその先生にあこがれてしまったということですね。石塚晴通という先ほどから名前が挙がっている方ですが、最終的に「先生のような仕事をしたい、勉強をしたい」というあこがれで、この道に入りました。

高田 それでは、今度のご講演・コメントに関する個別の質問にお答えいただこうと思います。一つ目は渡辺先生へのご質問です。「注釈が面白く、興味深いとのことでしたが、やはり漢文訓読を学ぶ上で、中国語、中国文学の知識は必須ですか」という質問が届いています。

渡辺 確か富山大学は中国文学と中国語学の授業がありますね。私は中文の授業を率先して履修していた記憶があります。そこで中国語の音韻体系や中国語の辞書について学びました。漢文訓読に必要な知識を得られたと思っています。

ただ、私は中国語が話せません。スタートが遅かったというのは言い訳かもしれませんが。とはいえ、漢文訓読を学びながら、それと並行して中国語学の授業を履修してよかったと思っています。話せなくても中国語や中国文学の知識は必要だと思います。

高田 同じ質問を、できれば中国人研究者の唐煒さんにもお答えいただきたいのですが。

唐 先ほどはどのようなきっかけで漢文訓読を研究しているかということでしたが、それは中国文学とも関係があると思います。私自身の研究テーマは、二字漢語の訓読で、『日本書紀』に使われた中国古語文献の語彙です。そうすると、やはり中国語の能力がなければ研究はできないと思いますが、もしそのままの古典漢文の訓点をやるなら中国語が分からなくても大丈夫だと思います。

高田 続いて、渡辺先生のご講演への當山日出夫先生のコメントに対してのご質問です。

「訓点語研究が他の分野からも参入が可能として、今、視野に入れている分野はあるのでしょうか。既に協力を求め、結果が出ている研究内容はあるのでしょうか」という学際的な内容に関する現状といえますか、成果についてです。

當山 非常に難しい質問です。答えになるかどうか分かりませんが、今は逆にその壁が非常に低くなっていると思います。私が慶應大学の学生的时候、学科の壁は非常に高かったのです。国文科、日本史、東洋史ともものすごくハードルが高いのです。国文科に入れば国文の勉強しかやってはいけないという雰囲気だったのですが、最近はそういうハードルが割と低くなってきて、日本文学のところにながら中国文学の勉強をして、東アジアの勉強をしたいというような雰囲気ができるようになってきました。この大学でもそうだと思いますが、東アジアのことを勉強しようと思えば、日本語、中国語、朝鮮語、韓国語と

自在に勉強できる環境が整ってきているので、非常にいい状況になってきていると思います。まずは、少なくとも東アジアに関する基本的な諸言語、諸文化に対する基礎知識は必要だろうと思います。

それから、これは高田さんとの話とも関係しますが、これからの訓点研究にも構造化記述が必要になれば、コンピューターの情報処理関係の人たちとのコラボレーションが絶対に必要になってきます。ですから、訓点語学をやっているから文献さえ扱っていればいいというわけではなくて、コンピューターによる情報処理も考えなければいけないということで、そういうこともこれから視野に入れていきたいと思います。

高田 それでは、今度はジョン・ホイットマン先生のご講演へのご質問です。たくさんありますが、一つずついきます。一つ目は「訓読とは他言語を自言語で読むということとご説明なさいましたが、他言語を自言語で読むということから、訓読は翻訳にかかわってきませんか。訓読と翻訳の違いとは何ですか。訓読が翻訳に与える影響について先生はどう考えていらっしゃるでしょうか」。同様に「中国語、つまり漢文を日本語で読むことだけでなく、国に関係なく他の言語を自言語で読むということが訓読することであるという理解をしてよろしいですか」というご質問があります。訓読と翻訳はどう違うのか、同じなのかという質問です。

ホイットマン ありがとうございます。極めて的確なご質問だと思います。小助川先生のゼミの学生さんからの質問だと聞いていますが、まさに尋ねるべき質問です。訓点というもの、あるいは私が定義したように他言語を自言語で読むということは、一般的な翻訳とどう違うかは、本当に明確にするべき問題です。

このパネルが始まる前にお隣の當山先生とご相談する時間がありました。これは當山先生の言葉ですが、翻訳の場合には、例えばアルベリッツィさんが挙げた『平家物語』の場合、私もし『平家物語』を英語に訳そうとすると、私の前に『平家物語』があって、その英語版を書いたことによって日本語の原典が完全になくなってしまいます。翻訳を読む英語が母語の人の視野から、原典が完全に消えてしまうのです。漢文訓読の場合には原典が残ります。なくなりません。目の前にあるのは原典です。でも、読むのは自国の言語です。それが違うのです。翻訳の場合には原典が消えてしまいます。全くそれに触れることがありません。訓読の場合には原典が残って、それを自分の言語で読み上げるということです。

それに関係する概念、あるいは事実としては「読む」という言語行動の定義です。「読む」

とはどういう意味なのか。われわれ現代人は、電車の中か自分の部屋に座って黙読する行為が読むことだという考え方が一般的ですが、古代の人たちは果たしてそうだったのか。まず、読めて、書けた人が非常に少なかったのです。それは専門的な技術でした。どのように文字資料を使ったかという、声を上げて朗読することが多かったのです。今日の話に出てきた社会のすべてでは、多分、中心的だったと思います。そうすると、原典をもって自国語で読み上げることは極めて自然なことだったのです。原典をもって翻訳するといえばそうですが、訓読と翻訳の違いは原典を残すことです。ですから、注釈を原典に付けて、読むときは別な言語で読むという行為が訓読だと思います。

一つ悩むことは、「訓読」は日本語です。本当は中国語なのですが、日本語独特の意味を持っています。それを国際用語にしようとした場合に何と呼ぶべきか。今の考えでは「翻訳」と呼べば誤解を招くから別な用語が要るのです。今、選択肢が二つあります。一つはそのまま「訓読」と読むことです。日本語を借用して使うという選択肢もありますが、今日ご覧になったように韓国語にもほかの国にも同じような現象がありました。

もう一つは、「訓読」を英語あるいはその他の言語に訳すという選択肢です。実は小助川先生が中心になって、私と朴先生、ルイージ先生も協力して訓読関係の用語の英訳、イタリア語訳、韓国語訳を試みっていますが、簡単ではありません。でも、やはり翻訳と訓読を区別する必要があると思います。

高田 翻訳と訓読に関してどなたか。ルイージ先生は翻訳のご経験もおありですね。

アルベリッツィ 翻訳の経験があるといっても、訓点資料を翻訳したわけでもないのです。翻訳というのは確かに本文が消えた形です。その後で、例えばもっと厳密に言えば、どの程度文法に沿って翻訳するかという大きなポイントも残っています。

例えば、よしもとばななでも村上春樹でも構いませんが、それぞれの翻訳は、その言語を理解する読者がどの程度そのテキストを同じニュアンスで受け取るかということが非常に大事です。つまり、ある意味で翻訳イコール意識というわけではないのですが、意味解釈と言ってもいいのです。それが、特に文化が非常に離れている日本文化と西洋文化のような場合によく生じる問題だと言えます。

訓点資料の場合、少なくとも内容解釈という点が非常に重要だと思うので、その意味では、例えばホイットマン先生が紹介したようなヨーロッパのキリスト教関係の資料など、少なくとも内容を理解した上で、何かの糧になるという過程が非常に大事だったので、翻訳とは明らかに素地が違うような気がします。

高田 では、唐煒先生。

唐 「訓読」の英訳について、私が思い出したのは、石塚先生が論文を英語で翻訳するときに、先生はいつも中国語の用語を使っていたことです。私は「それは“シュンドウ”で、中国語ではないのですか」と言いました。英語にそういう専門用語はありませんが、今までの先生の論文は全部“シュンドウ”になっていると思います。

ホイットマン 今の唐先生のご指摘に関してですが、石塚先生は少なくとも漢字文化圏の場合には、原典が中国ですから、中国語を使うという方針もよく分かります。

ただ、そこで気になることは、一つは、もしも同じような習慣が漢字文化圏以外にもあるとすると、果たして中国語を使っていいかどうかということ。もう一つは、“シュンドウ”というのは、同じ意味で果たして中国で使うのかという問題です。つまり、日本語の「訓」の概念と中国語の“シュン”とは意味が随分変わってきたというような気がします。

実は小助川先生が中心になった訓読関係の用語の英訳、イタリア語訳、韓国語訳の研究で、われわれはこういう英語を考えました。“vernacular reading”です。それ以後、かなり論じられた翻訳ですが、“reading”は英語で「読む」こと、“vernacular”は「自語」のことです。ですから、「自語で読む」という意味でよいとすれば、「訓読」はこのような英訳が可能となります。ただ、訓読の理解がそれでいいのかどうかという根本的な問題が依然としてあります。

高田 「訓読」を英語で表したときにどういうタームになるのかということについては、議論が尽きないようです。

ちなみに、韓国語では「訓読」を何とおっしゃいますか。

朴 韓国では以前は「稊読」という用語がよく使われていましたが、最近は日本の研究者との交流が盛んになっていますので、「訓読」という用語も今はよく使われていると思います。

高田 ありがとうございます。訓読と翻訳、「訓読」の英訳についての議論はこのくらいにしましょう。

次の質問はちょっと長いですが、「日本の漢文訓読が朝鮮半島からもたらされたのではないか」という議論と、仮名文字が朝鮮半島からもたらされたのではないかという議論が、特に2000年の角筆文献の発見以後、連動したものとして論じられることが多いのか、教えてください。朝鮮の口訣文字に漢字の略体を用いたものが多数含まれていることは、角筆文献の発見や1970年代の稊読口訣の発見以前のはるか昔から音読口訣資料に見られることで

知られていたはずなのに、仮名の起源の話題が角筆文献発見の2000年以後になって急に高まったのが不思議です」ということで、角筆文献の発見と漢文訓読、それから日本の仮名文字の伝来に関する議論は関連があるかどうかというご質問です。

ホイットマン これも的確なご質問で、お答えするのが難しいですが、私なりの意見を述べて、その次に朴先生をお願いします。

質問では、韓国の口訣資料は1970年代から既に知られていたということですが、恐らく口訣文字の存在はそのほるか前から忘れられたことはなかったと思います。その存在は韓国の専門家、特にお寺にいるお坊さんなどがずっと知っていました。忘れられたことはありません。

今のご質問では、70年代に韓国の釈読口訣が発見され、紹介されて、確かに文章となった古い資料がそれぐらいからだということになりますが、富山大学の藤本幸夫先生が先頭に立って、その研究を既に70年代に日本に紹介していたことは事実です。ですから、仮名文字が口訣文字から来たという議論が70年代からあってもいいということに私も賛成です。

なぜ2000年になってその議論が活発になったかということに関しては、恐らく藤本幸夫先生と小林芳規先生の研究のスタイルの違いに由来すると思います。藤本先生は素晴らしい発見をしても宣伝はしません。ですから、例えばNHKやマスコミには注目されません。素晴らしい研究をしていますが、注目されないのです。小林先生の場合は、小林先生が宣伝をするというわけではありませんが、まず韓国のメディアに注目されて、それが日本に伝わってきたということです。一種の偶然だと思いますが。

朴 2000年に小林芳規先生が、韓国で角筆で書かれた訓点資料を発見された後、小林先生は京都の大谷大学に所蔵されている『判比量論』という本に注目しました。新羅に元暁（がんぎょう）という偉いお坊さんがいますが、その本は彼が書いた仏教認識論、あるいは仏教論理学の本です。大谷大学にあるその本に角筆で文字が書いてあります。

漢文の原文に「根」とありますが、その右に「マリ」と角筆で書かれています。その文字を小林先生は「ブリ」と読みます。「ブリ」はその漢字の韓国語である「ブリ」と発音がよく似ています。それで小林先生は、この表記は漢字の略体字を利用して古代韓国語を表記した用例だと主張しているのです。

この『判比量論』という資料の表記が発見される前までは、韓国の口訣資料の文字が日本の片仮名と似ていることは事実ですが、年代は韓国の口訣資料が日本よりもはるかに後

なので、日本の仮名が韓国からの影響だと主張することは困難でした。この資料は日本の仮名文字が発生したのと同じ時期の資料ですから、日本の仮名に朝鮮半島からの影響があったという小林先生の主張が支持されるようになったと思います。

ホイットマン 朴先生自身は『判比量論』の小林先生の解釈をどうご評価されますか。

朴 『判比量論』に角筆でこの表記があるかどうかについては、研究者の中で異論があります。小林先生は「この文字が見える」と主張していますが、『判比量論』の原本を見たほかの研究者の大部分は「私の目には見えない」と言う方が多いです。私は実物を見たことがありませんので、その問題については判断を保留しています。

ホイットマン ありがとうございます。

高田 『判比量論』というものがあって、そこにそれらしい文字があるという報告が基になって、仮名がどこから来たのかという話題が出てきたのは確かに事実です。

それではもう1件、ジョン・ホイットマン先生に質問が来ています。「シュメール語がアッカド語に借用されて、どちらの言語も併用されていたのなら、その両方の言語をみんな理解して読んでいたということでしょうか」というご質問ですが、会場におられる筑波大学の永井先生がそちらの地域の言語にも詳しいので、代わりにお答えいただこうかと思えます。

永井 私はシュメール語やアッカド語の専門ではなくて、古代エジプトの象形文字の専門ですが、池田潤先生の下で博士課程を終えたということもあるので、コメントさせていただきます。

このシュメール語とアッカド語の訓読みは、実は日本語の中の漢字の音読み・訓読みに近いものです。漢文訓読というと漢文という中国語がベースにあって、その周辺に訓点という記号を付けていきます。そういった外国語の原文と記号という二つのレイヤーからできています。それに対して日本語の音読み・訓読みは、日本語のベースの中に中国語式の読み、日本語式の読みがあります。

楔形文字の訓読みはまさにそれに当たります。シュメール人という民族系統が不明な人々が最初に楔形文字を作り、その後、セム系のアッカド人がその文字を借りてアッカド語を書いたということです。先にシュメール語の文字があったので借りてきただけで、両方を使っていたというわけではなく、文字を借りてきたときにシュメール語式の読みもあり、そして、シュメール語はアッカド人から見れば外国語ですから、自分たちの読みもそこに加えていったということです。

音を加えればそこに表音文字の要素が出てきて、さらにそれを訓読みしたものをまた音読みに使って、いろいろな単語に当てはめていったということで、シュメール語とアッカド語の両方を話していたというよりも、シュメール人が作った文字をアッカド人が借りてきて、日本語の音読み・訓読みのようなシステムを二つ使っていたのです。

高田 どうもありがとうございます。

ホイットマン先生、お願いします。

ホイットマン 今のご説明と同じように、アッカド語には訓読みと音読みがあるという話までは確実ですが、果たして訓読と言えるようなものがあつたかどうかに関しては、私が知っている限り、まだ証拠ありません。

借用文字の訓読み用法と音読み用法とはまた別に、同じ地域でアッカド人が中心になってから、かなり長い間、シュメール語が引き続き使われたのです。誰が使ったか、誰が書いたかということに関してはいろいろ問題があると思います。アッカド人がシュメール語を学んで書いたのか、それともシュメール語を口頭言語として話せる人が書いたのか、いろいろ不明な点があると思います。

楔形文字の専門家をお願いできればと思うことは、この二つの表記言語が一緒に使われている間に、アッカド人がシュメール語で書かれた文章をアッカド語で読んだという根拠があるかどうかということです。訓点のようなものが残らないと、あるいは先ほどの中国の歴史書のような記述がないと分からないのです。訓読の定義ともつながりますが、訓読は他言語をもって自言語で声を上げて読むものですから、知り得ないというか、難しいと思います。私の推測としては、1000年も併用したもので、ひょっとしたらあつたのではないかとは思いますが、それは単なる素人の推測に過ぎません。

高田 続いて、ホイットマン先生への小助川先生のコメントに対する質問です。「今後、訓読はやはり日本だけが使っている他言語理解ツールのままなのでしょうか。それとも、再び他地域でも訓読のようなツールが使われるようになるのでしょうか」というご質問です。

小助川 大変いい質問だと思いますが、大変難しくもあります。いわゆる言語学の観点から見ていくと、訓読という現象は非常に面白いと思います。研究対象として面白いのですが、それを私たちがこれから残していけるかどうか、あるいはほかの言語でもそういうことが起こり得るかどうかということですが、日本の場合、学校教育という非常に強力な下敷きがあるので、そこが崩れない限り訓読がなくなることはないと思います。ですから、

学校教育の現場をつくり上げていく中で、要するに、学習指導要領の中で訓読をどのように位置付けていくか。逆に言えば、私たち研究者がそこにどんな働き掛けができるか、できないかにかかわってくるのではないかという気がします。

それから、ほかの地域でも使われるかどうかということですが、恐らくこれはホイットマン先生とアルベリッツィ先生の方がお詳しいと思います。特に欧米の方が日本文学や日本文化を学ぶときに、どこかで訓読を勉強して、原典に近づいていくというようなやり方があると思いますので、むしろ欧米の日本研究の方が訓読というツールを使い続けるのではないかということはあると思います。そのあたりはまた聞いていただければと思います。

高田 いかがですか、アルベリッツィ先生。

アルベリッツィ そのとおりだと思います。先ほどの自己紹介のときに、「どうしてこの研究分野をしたのですか」とあったときに、まだ申し上げていなかった具体的な理由があります。漢文訓読を勉強することで、ある意味で一石二鳥が得られるような気がしたのです。漢文はイタリア語に文の構造が非常に似ているので、イタリア語として読めれば、また話が複雑になりますが、イタリア語訓読になるかもしれないのです。イタリア語として読めれば楽です。わざわざ日本語にして、また元に戻すということは大変な作業なのです。

訓読を勉強することによって、平安時代の古典日本語を振り返ることができます。例えば、欧米の学生があまり触れることのない平安時代の古典日本語の定番となっている文法と、歴史的な変遷がどのように違うかということが、訓点資料を使って初めて普通に目に触れることがあって、「あっ、実はそんなことではないな」という感じがあるのです。

それと、渡辺先生の話にあった声点です。私は声点の存在を2002年に初めて知りました。大学の演習に出て知りました。確かに実用性があります。

最近はずっと道具としての訓読が注目を浴びているような気がします。古典日本語に興味を持っている学生、あるいは普通に高度レベルの研究者などが参加する「漢文ワークショップ」が、アメリカの大学主催で、今年の夏はドイツとアメリカとそして京都で行われる予定です。この時機に道具としての訓読だけではなく、歴史的な訓読も紹介できたら絶好のチャンスではないかと思います。

高田 ホイットマン先生、どうぞ。

ホイットマン 道具としての漢文訓読の実用性に関してですが、欧米人である私として、二つ考えがあります。

一つは、小助川先生の漢文、あるいは訓点を勉強することの第3の目的ですが、英語が

世界の共通語であるという状態は、かつての歴史を考えるといつまでも続くはずがないと思います。既にあちらこちらを見ると、漢字文化圏がこれからの100年の間によみがえって復活するという可能性は決して排除できないと思います。そういう意味で、日本人が非常に有利な立場といますか、西洋の文字・言語を知りながら漢字も読めるという立場は、将来日本人にとってかなり優位な立場にあるということも忘れてはならないと思います。

もう一つは、普遍的な現象としての訓読ですが、漢字に限らず、将来に出るかどうかなどということなのです。今いろいろな国にいわゆるネット言語がありますね。ネットでどう書くか。例えば点々を使うとか、そういうことです。それを見ると、ある意味で原始的な訓読のような慣わしになっているものもあると思います。これも研究に値するでしょう。例えば「(笑)」と書くとき、それを読もうとしたらどう読むか。もしかすると、そこからさらに新しい訓読のようなものが生じるかもしれません。

高田 朴先生、どうぞ。

朴 私は、漢文訓読と学問をする基本的な態度は関係があると思います。訓読は日本だけではなく、今日いろいろな先生方がおっしゃったとおり、いろいろな国で行われましたが、今まで長い間保存されている国は日本だけではないかと思います。訓読が日本だけのものだというのは視野が狭い意見だと言えますが、今まで漢文訓読を保存してきたのは日本だけだという事実は確かだと思います。日本人はそれについて自慢するべきだと思います。

私が韓国人として日本の漢文訓読について勉強し始めたときに印象深かったのは、一つの文字も捨てずに、すべての文字を緻密に読むということでした。韓国では、哲学、文学、漢文をよく読める人がいますが、韓国では漢文を読むとき、虚字にあまり注意を傾けない傾向があると思います。韓国でも、高麗時代までは日本のように漢文を緻密に読む訓読の伝統がありましたが、14世紀ごろからはそんな伝統は失われました。

最近、韓国の哲学や文学の研究者に、日本の漢文訓読や韓国のヲコト点資料について説明したら、その方は「漢文テキストを一度見たらよく分かるのに、なぜそんなに面倒くさいことをするのですか」と言われました。もちろん、韓国の漢文文法の教科書には一つ一つの虚字について説明がなされていますが、実際に漢文テキストを読む現場で一つ一つの虚字に注意を傾けて緻密に読む伝統は今の韓国にはないと思います。

漢文訓読は、漢文テキストを緻密に読むトレーニングとしても価値があると思います。もう少し広く考えれば、学問をする態度、資料にアプローチする態度としても、日本の漢文訓読が対応する態度は価値があると思います。

ちなみに、漢文訓読の研究にはいろいろな学問的な規範が必要だと思います。先ほど當山先生がおっしゃったとおりです。でも、いくら重要な学問でも、それを研究するための規範、教育システムを備えていなければ、その研究を振興する次の世代の養成ができませんでしょう。韓国の場合、日常生活の中で漢字と漢文を勉強する機会が少ないのです。その意味で、韓国では漢文訓読を研究する次世代の養成については展望が暗いと思います。韓国も日本も、次の世代が漢文訓読をうまく研究するためには、その研究の規範になるいろいろな学問の分野について教育システムが重要ではないかと思います。この問題について、ご意見を聞きたいです。

高田 ご意見はないですか。では、渡辺先生から。

渡辺 日本語を学ぶ、例えば現代日本語、日本語の文法を勉強するという側面を考えるにしても、漢文をきちんと読めるということはプラスになると思います。例えば先ほど虚字の話が出ましたが、日本語の場合も漢文を読み下すときに読まない字があります。高校で漢文を読み下す練習をしたときに「この字は読まないのですよ」と言って読み飛ばした字があったと思うのです。そこをしっかりと勉強すると、そういうところにこそ話し手の気持ちが表現できるというような文献も過去にあります。

きちんと原表記が残っているものを読むからこそ、読み手側の気持ちの判断もできるということもありますので、漢文構文が残っているものを丁寧に読み解くということは、決して煩わしい、面倒くさいという問題ではなく、日本語の勉強をするときには何かしらプラスになる面があるはずだと私は考えています。

ホイットマン 朴先生のご質問ですが、私は全く同意見です。日本の訓読の伝統、訓読に対する知識の保存は非常に重要な課題で、貴重だと思います。

昭和年代に自分は大学を出て、大学院に入る前に日本に初めて来ました。そのときに、アメリカの他大学の大学院から日本にやって来る研究者が一緒に来たのです。その中に専門が中国関係だった人たちが大勢いました。中国の古代史、中国文学、あるいは漢訳仏典を研究している人たちです。なぜ日本に来て中国の古代史や文学を勉強するかというと、一つは、当時の中国はまだ少しアメリカ人にとって行きにくかったということもありました。

もう一つは、アメリカのみならず西洋では、日本における中国の文章解釈の水準の高さが普遍的に評価されています。今でも、ヨーロッパは分かりませんが、アメリカで漢訳仏典を勉強する人たちの共通語は、中国語ではなくて日本語です。漢訳仏典を外国人として

勉強しようと思えば依然として日本に来るしかありません。ですから、そういう意味で、その伝統をぜひ日本人に保ってほしいと、私も同じように考えます。

アルベリッツィ 確かにヨーロッパでも大体そんな感じですが。ホイットマン先生の話にも出たテーマですが、日本の漢文訓読の特徴は、最初は漢籍ではなく仏典を取り扱っているということなのです。当時の、少なくとも古代人の仏典の解釈と意味解読を理解するためには、日本の仏典の訓点資料が不可欠になります。宗教関係者の方々も、日本思想の関係者の方々も日本語から入って、訓読で資料を読みながら注釈も含めてやってきたわけですから、非常に大事な課題だと思います。

高田 時間も残り少なくなってきましたので、最後のご質問に移りたいと思います。ご本人の富山大学の米田猛先生からよろしくお願いします。

米田 本学の人間発達科学部、昔の教育学部ですが、教員養成を目的とする学部で国語科教育を教えている米田と申します。

私がこのようにたくさんの専門家の方がいらっしゃる中で今日参加させていただいたのは、私自身が大学のときに、鈴木一男という奈良にいらっしゃった先生について、訓点語学を研究し、東大寺図書館の仏典を読み解いて、音韻、語彙、文字等々を分析するという卒論を書きました。卒業して中学校の教員になり、すっかりその世界は忘れていたのですが、富山大学に赴任して、小助川先生がいらっしゃるということでまた突然興味を持ち出しましたというわけです。もちろん勉強はしていません。今はもちろん教育の世界から見ているのですが、そんな関係で出席させてもらいました。

鈴木先生は私が学生のころに「ワコト点の源流は朝鮮半島にある」とおっしゃったのですが、まさにそれがひょっとしたら正しいかもしれないと思っています。

日本語教育ではなくて、日本の子供に日本語を教える国語教育の立場からぜひ伺いたいのと、私が今からする質問は訓点語学に限らずすべての学問の生き残りにかかわる問題だと思うので、そういう意味で聞いていただきたいのです。日本の国語教育で新しい学習指導要領が出て、伝統的な言語文化、あるいは「国語」と言っているのですが、国語の特質を教えるという領域があります。実際に学校の先生方はそういうものの知識を持って、例えば小学校1年生には片仮名を教えますね。「ワ行のワを何画で書きますか」と聞くと、先生方は「2画で書く」と言う方が半分ぐらいおられます。実はこれは3画なのです。小学校1年生にはちゃんと筆順を教えています。そこまでは子供の世界ですが、では、なぜ3画なのかと聞くと全然分からないのです。

それから、「ヲ」の字母は、教科書には「乎」という字だと書いてあるのですが、私にはどうも筆の運びからして納得できないのです。訓点資料に「∴ (ゆえに)」のような「ヲ」がありますよね。それだと「なるほど、筆の運びから納得できるよな」と思うわけです。

それから漢字の訓読みに関しても、例えば小学校や中学校では「音読みは中国から伝わった読みで、訓読みはその漢字の意味を表します」という教え方をします。そうすると、例えば「鮮」という字を「鮮魚」と使ったら、あれは「鮮やかな魚」なのかと、全然意味が通じない話になってきますね。漢字の意味と訓読みを同一視しているのです。子供は非常に疑問に思うわけです。「歴」を「歴然」と言ったときに「なぜ『歴然』と使うのですか」と思うのです。

非常に学問的に深くなっているから、小学校や中学校、高等学校の先生に研究成果で当たり前のことを言うのはばかばかしいと思われるかもしれませんが、むしろ小中高等学校の先生方はそういうことを知って、子供たちに非常に興味を持たせる授業をすればいいのではないかと、大げさに言えばこの学問の生き残りにもかかわる問題だと思って発言させてもらいました。世間というか、少なくとも教育の世界に、こういう学問の成果を広めるような考えは非常に大事だと思うのですが、いかがでしょうか。

高田 教育実践と学問・研究との間の問題について、どなたかコメントはありませんか。

アルベリッツィ まずは私から少しだけでもコメントさせていただきたいと思います。

仮名字体については、まさに訓点の研究が非常に役に立つと思います。小助川先生がより詳しいと思うのですが、近代訓点資料の研究は1909年の大矢透の『仮名遣及仮名字体沿革史料』から始まります。大矢透先生は、正倉院に収められているいろいろな種類の典籍に目を触れるチャンスを得たわけですが、『仮名遣及仮名字体沿革史料』にはそれぞれの仮名の字体を記入した上で、当時の国語調査委員会の一つの資料として、どの仮名の形にするか、あるいは片仮名の基準化の一つの判断基準としてよく使われていたので、そこにはかなり結び付きがあります。その後で、このような資料には、変わった言い方で言えば「変な符号が多いものがある」と、当時の九州大学の春日政治先生が、初めてまとまった一つの資料に全部目を通して、それを読み下して初めて近代訓読の研究が始まったのです。

今日のポイントの一つは「見せる」ということで、例えば私はまだそれほど古い人間ではないのですが、私が訓点資料の勉強を始めたとき、写真は白黒で見えるものでした。今はネットで立派な画像が簡単に見られます。ですから、小学生にもパソコンやタブレット型端末などを使って、訓点資料の画像を視聴覚的な形で見せることができれば、教育に十分

役に立つのではないかと思います。

渡辺 訓点資料を見ていると、常用漢字表に書かれている「訓」や「音」は本当に限られたものだなと実感します。そこから学校で習う教育漢字が選ばれているのだと考えると、教科書で学ぶ「読み」というのは本当に限られているのだと思います。

私なども時々、仕事柄、「高校生に向けて模擬講義をやってください」という話をもらい文字の話をするのですが、その中で学校では習わない漢字の「読み」についても話をします。歴史的なところも踏まえて丁寧に説明するのですが、同時に「学校では習わないかもしれないけど、教養として身に付けておくと自分自身の知識も増えるし、人生も楽しくなるよ」というようなことも付け加えます。しっかりと根拠を示すことができれば、教養の範囲として子供たちに教科書に載らない内容を教えていくのも面白いのではないかと思いますね。私は、高校生を対象とした模擬講義の中でそういう努力はやっているつもりです。

米田 ありがとうございます。実はこの夏に国語の先生を集めた講習会があって、国立国語研究所のホームページで公開している訓点資料がございますね。あれにはあまり訓点は付いていないのですが。

高田 はい、あまり付いていません。

米田 あれを見せようと思っています。

それから、そういうことを教える先生方が、例えばこういうことに興味を持って、具体的な資料でもって子供たちに示していけば、子供たちは本当に興味を持つのではないかと考えています。ありがとうございました。

高田 それでは、今のご発言に対して小助川先生からコメントを。

小助川 私は研究の「教育的還元」と以前から呼ばせていただいているのですが、いろいろと難しいハードルがあります。一つには、学校の先生方が非常に忙しすぎて、私たちがツールを開発して、「こんな教材があるのだよ」と紹介しても、それを習得するだけの時間的余裕がないという現場の忙しさがあると思います。

それからもう一つは、研究者の中に「還元しなければいけない」という気持ちを持っている方が非常に少ないと思うのです。例えば訓読という一つのくくりで言いますと、言語研究の世界では訓点語学会という世界があります。訓点語学会でどこかの高校に行って、模擬授業や出前授業、講習会をしたことはかつて一度もありません。講習会は一応あるのですが、あれは二松學舎大学のCOE絡みで、やらなければいけないのでやっただけで、訓点語学会から積極的に行ったわけではありません。

一方、教育的な観点で訓読を議論している組織に全国漢文教育学会があります。これは毎年春と秋に学会を開催するのですが、春は首都圏で行い、秋は各地方を回って、そこで研究授業を実際に中学校や高校で行って、現場の先生の漢文教育力を高めようという教育的配慮でやっています。当然そのバックになる団体も違って、訓点語学会というのは全く任意団体です。どこの保証もありません。全国漢文教育学会がやるときは文科省と各都道府県の教育委員会がバックに付きます。

明らかに、現場でやる方と研究でやる方が、あまりにも離れすぎているということを私は強く感じています。いきなり私たちが学校の現場に行くことは非常に難しいと思います。例えば、訓点語学会と全国漢文教育学会が合同で何かやってみようと考えたことがある人はいないと思いますので、そのあたりからまず進めていかないといけないのではないのでしょうか。

それから、教材の開発があると思います。特に訓点の世界はなかなか資料がありません。国立国語研究所の『大教王経』は非常にまれなケースですので、ああいうものが教材としてあるというような、例えばリストを作ることはできると思います。教材開発よりも、むしろ研究材料の開発と言った方がいいと思います。訓点語学会の会員は四百数十名いるのですが、訓点資料の本物を見たことがないという方がほとんどです。ですから、そういう方々のためにも研究材料を提供するような取り組みをしていかないと、私たち自身の訓点語学会、訓点研究者自体が長生きできないことは目に見えています。

これはほかの分野でもそうだと思います。後進をどのように育成していくかを真剣に考えていかないといけないと思います。今日は米田先生にお忙しい中、お越しいただきましたが、こういう場に現場の先生が一人でも来ていただければ、私たちにとっては非常にありがたいものです。私たちもできれば現場に行って、実際の教育の場にいる先生方と交流する場があればと思います。ちょっと変なコメントですが、そう考えています。

それから、もう一つ、これは教養の授業の中で学生からのアイデアとしてあったことです。私はよく「材料がない、いい画像がない」という話をしているのですが、「先生、図鑑を作ってみたらいかがですか」と言われました。例えば歴史図鑑、聖書の図鑑などがたくさんあり、ああいうものを見ますと、カラーで、こういう資料があつて、説明が簡単に書いてあります。訓点資料もできるではないですか。漢字についての図鑑はあります。小林芳規先生と阿辻哲次先生が書いています。訓読や訓点の図鑑も作れば、教育的な場で実際に使えると思います。

高田 どうもありがとうございます。

予定時間を過ぎていますので、これでディスカッションを終了したいと思います。パネラーの皆さま、聴衆の皆さま、長時間にわたり誠にありがとうございました。これにてNINJALセミナー「漢文訓読再発見」を終了します。